

障害児保育の技術向上を目指した 保育士へのコンサルテーションと保育士による相互研修の効果

佐 藤 暁
(岡山大学 教育学部)

<要 旨>

障害のある幼児を保育園で預かるときに、たちまち問題になるのが、保育士の実践力である。今回の研究では、岡山市の障害児保育拠点園に勤務する園長及び保育士を対象として、専門家による保育のコンサルテーションと実践発表・公開保育を軸とした相互研修を実施するとともに、その効果を検討することにした。コンサルテーションでは、市内9つの拠点園を年3回巡回相談というかたちで訪問した。また、実践発表会を年4回、テーマを設定して開催するとともに、年1回ではあるが、公開保育を実施し、園長・保育士同士の相互研修を深めた。

これらの取り組みに対し、各園の園長と保育士にアンケート調査を実施したところ、おおむね好意的な回答が寄せられた。しかし、その一方で、①個々の保育士のニーズにあった研修、②保育実践に生かせる研修、及び③保護者支援にかかわる研修、といった側面に課題が残されていることが分かった。

<キーワード>

障害のある幼児 保育技術の向上 コンサルテーション 保育士の相互研修

【はじめに】

1. 障害児保育の現状

保育園における障害児保育は、いま大きな岐点に差し掛かっているように思う。従来から進められてきたいわば素朴な「統合保育」が見直され、一人ひとりの幼児の特性やニーズに合わせた保育実践が求められるようになった。

ところで、現状はどうかというと、たしかに以前のような安易な「統合」でよしとする考えをもつ人は少なくなった。その一方で、いざ個々の子どもの問題を考え、実際の対応を検討しようとなると、たちまち解決困難な問題にいきあたる。

まずは、発達障害の診断のついた園児が増加していること。それに加えて、保育技術が確立

していない自閉症の子どもに関する問題がにわかに大きくなってきている。

さらに、そうした子どもたちを育てる保育士の不足。待機児ゼロ施策の裏返しで手狭になった保育スペース。そんななかで、いかに保育をやり繰りするか。あげればきりが無い。

2. 拠点園方式による障害児保育

岡山市(人口68万人)では、障害のある子どもへの保育を保障するために、拠点園方式による保育実践に取り組んできた。現在、市内9つの園(公立8、私立1)が、障害児保育拠点園に指定されている。拠点園では、3歳以上で、障害のある幼児10名を、5名の保育士が担当している。

今回は、これらの拠点園をフィールドとして研究を進めた。

3. 保育士の研修

今回取り上げたテーマは、地域における保育士の研修である。

障害のある幼児の保育については、残念ながらほとんどの保育士が十分な研修を受けていない。最近では、講演会が開催される機会が増えてきているとはいえ、しかし講演できいたことが日々の保育の向上にそう簡単にはつながらないというのが現実ではないだろうか。

岡山市の拠点園では、これまで巡回指導というかたちで、それぞれの園に年3回、専門家が派遣されてきた。また、各園の園長及び障害のある幼児を担当する保育士が、年に3回程度集まって拠点園関係者会を開催し、情報交換を行っていた。さらに、年に一度、拠点園における公開保育を実施してきた。

本研究は、こうした研修の仕組みをベースにしながらも、より効果的な保育士研修のあり方を模索するために企画された。とくに、情報交換にとどまっていた拠点園関係者会を発展させ、それを核にした保育士研修プログラムを企画するとともに、その効果を検討することにした。

【方法】

1. 研修の実施期間

2005年5月から2006年3月まで。

2. 対象

研究対象とした保育園は、岡山市内の障害児保育拠点園（以下、拠点園）9園である。

研修の対象は、園長及び障害のある幼児を担当する保育士5名である。

3. コンサルテーションと相互研修

用意した研修は2タイプである。一つは、巡回指導によるコンサルテーション、もう一つは、実践発表及び公開保育による相互研修である。

1) 個人の研修テーマ

年度当初、研修をスタートさせるのに先立って、それぞれの保育士から「個人の研修テーマ」を設定してもらった。また、コンサルテーションや相互研修において「個人的に必要とされるサポート」が何であるかを書き出してもらった。

いずれも、よりニーズに適合したコンサルテーションと相互研修を実施するための参考資料として活用した。

2) 巡回指導（コンサルテーション）

各拠点園に年3回、園の事情によっては、さらに回数を増やして、6時間にわたって専門家が派遣された。

3) 拠点園関係者会（相互研修）

今回は、それまで情報交換にとどまっていた拠点園関係者会を、計画的な研修ができる会に衣替えした。

実施回数を増やして年4回にした関係者会では、毎回、あらかじめ設定されたテーマに基づいて実践発表をし、それをもとに意見交換をするという、相互研修の方式を採用した。

各回のテーマは、以下の通りである。

第一回 障害のある子どもの理解

第二回 プレイ（障害のある子どもの小集団保育）

第三回 保護者支援

第四回 園内の職員連携

なお、関係者会は、午後1時半から5時までの3時間半、別に会場を借りて実施された。参加者は各園の園長及び障害のある幼児の担当

保育士（以下、担当保育士）である。ただし、子どもが園に残っている関係で、5名の担当保育士のうち2名程度が、毎回交代で参加するということにならざるを得なかった。

なお、関係者会には、1－2名の専門家が参加し、協議場面でのコメントをした。

4) 公開保育（相互研修）

拠点園では、毎年持ち回りで公開保育が開催される。通称三気会と呼ばれているこの会では、園長をのぞいた担当保育士同士で、保育実践について相互研修を深める。

今回は、関係者会の研修テーマとリンクさせて、「プレイ」の実施方法について、細かな協議がなされた。

5) その他

保育園間では、必要に応じて園長・保育士同士が互いの保育を見学する機会を設けた。

4. 資料の収集

1) コンサルテーション及び相互研修

巡回指導によるコンサルテーションについては、筆者が直接立ち会って収集した記録と、他の専門家が訪問した際の記録とを資料とした。また、相互研修（実践発表と公開保育）については、当日配布された資料及び筆者による記録を資料とした。

2) 研修の効果

研修の効果を検討する資料は、園長及び担当保育士へのアンケート調査を実施することによって収集された。アンケートは、3部構成で作成した。第一部は、実践発表等を中心とした4回の関係者会と年に一回の公開保育に関する質問。第二部は、巡回相談にかかわる質問。第三部は、全体を通しての意見を求める質問である。

さらに、巡回指導等において園長・担当保育士に対してなされたインタビューなどから得られた資料も、補足的ではあるが効果を検討するうえで採用した。

【結果】

ここでは、①実施した研修内容と、②研修の効果、に分けて記述する。なお、実施した研修内容については、今回はじめて取り上げた関係者会における実践発表を中心に上げたい。

1. 実施した研修内容

1) 巡回指導

巡回指導は、それぞれの拠点園に、年3回専門家が派遣されて実施された。派遣されたのは、大学・養護学校・障害児学級等に勤務する、臨床分野での専門性が高い教員、医師、及び心理職だった。

巡回指導のプログラムは、午前中の3時間を保育参観（90分）と保護者懇談会（90分）、午後の2時間を保育士と専門家との懇談といった内容で構成した。保育参観では、「プレイ」と呼んでいる小集団保育を中心に参観した。保護者懇談会では、保育士と専門家とを交えて、子育てに関する課題を取り上げた。保育士と専門家との懇談では、日頃の保育全般について問題の解決を図った。

2) 関係者会における実践発表

(1) 第1回－障害のある子どもの理解

第一回研修会では、一つの保育園から、自閉症の子ども的一年間におよぶ保育実践の経過が報告された。

この実践報告を受けて、専門家より、「障害理解」に関する講話がなされた。とくに、はじめて障害のある幼児の保育を担当する保育士

にとって、その理解がなくては保育が困難な自閉症の問題については、重点的に解説がなされた。

(2) 第2回—プレイ (小集団指導)

第二回では、三つの園から、プレイと呼ばれる小集団保育の報告がされた。

プレイは、拠点保育園における保育の核となるものである。原則として、毎日、20—40分程度、在園児の実態に合わせて保育内容が組み立てられている。プレイの形態としては、次のようなものがある。それぞれ、小集団をベースにしているが、一部個別保育の形態や、通常のクラスの子どもを含めた形態も用意されている。

①個別プレイ：保育士とのマンツーマンによる保育。

②〇〇プレイ (〇〇は、障害のある子どものために用意された保育室の名称。各園で独自の名前がつけられている)：障害のある子どもだけを集めた小集団保育

③チームプレイ：②の形態のプレイに、通常のクラスの幼児が5人程度参加する。

④クラスプレイ：通常のクラスを単位としたプレイ。②の形態のプレイに、通常のクラスの子どもが全員参加する。

⑤親子プレイ：②の形態のプレイに、保護者が参加する。

実践報告では、それぞれの形態のプレイを実施するときの工夫や配慮点が示された。

その上で、専門家を交え、プレイのポイントを協議した。

(3) 第3回—保護者支援

二つの園から、保護者支援にかかわる提案があった。

保護者支援にかかわる配慮点が示されるとともに、次のような支援ツールが紹介された。

①一日の生活記録 (平日用・休日用)

家庭での過ごし方をタイムテーブル上に書き出す。子どもの動きだけでなく、家族の動きも合わせて書くのがポイントである。さらに、同じ紙の上に、支援のターゲットも優先順位をつけて書き込むようにする。

②子どもの嗜好調査

子どもの好きなこと・人、反対に苦手なこと・人を書き出す。子どもに身につけさせたいことがあるときに、強化子として使えるものはおさえておきたい。

③人間関係図

子どもとつながりのある人を、図で示す。また、子育てには、保護者の人間関係も大切である。

④家庭内の生活地図

家の間取りの上に、ふだんの子どもの動線や、家族との過ごし方などを書き込む。図に描いてみると、子どもの家庭での様子が手に取るように分かる。

⑤地域生活地図

家の周り、地域でどのように過ごしているのかを図で示す。行動範囲が狭いことに改めて気づいたり、逆に放課後や休日にどこで過ごしているのが保護者が把握できていないということが判明したりする。

(4) 第4回—園内での職員連携

関係者会最終回では、3つの園から、職員連携をテーマに報告がなされた。

拠点園では、通常のクラス担任と障害児保育の担当保育士との連携、そして園全体で子どもをみるといった組織的な支援が強く求められ

ている。しかし、多忙を極める保育士同士が協力し合うというのは、よほどの工夫をしない限り困難である。

連携のための手だてとしては、「園内実習」と呼ばれる、保育士同士が互いに他のクラスに出向いて子どもをみる取り組みが、効果があったようである。とくに、障害のある子どものプレイに、通常のクラスを担当する保育士が参加することで、この子たちへの保育の手だてを共有できた。

一方、保護者の協力も得ながら、保育士用のサポートブックを作成して職員室に置き、どの保育士にも障害のある子のことを理解してもらえるようにした園もあった。

3) 公開保育

2005年度は、関係者会のテーマとして取り上げた4つのテーマを意識しながら、午前中の保育を構成し公開した。

午後からは、研究協議に長い時間をかけた。現実的な保育の課題を共有するとともに、考えられる手だてを協議した。

4) その他一拠点園間の相互訪問

オプションではあるが、拠点保育園の間では、必要に応じて、保育士が相互に行き来する機会を設けた。

一例をあげよう。

A保育園の保育に、B保育園の担当保育士が朝から訪問する。B保育園の担当保育士は5名だが、その日だけ園内でやりくりして2名が出られるよう、園長が取り計らった。

午前中は、「プレイ」を中心に、一人ひとりの生活にあわせた保育がどのように行われているかを見学する。

午後からは、午前中に参加できなかった3名

の保育士と園長とが合流する。さらに、その日は専門家が一名加わった。A保育園からは、園長、担当保育士さらに交流クラスの担任も参加した。

ビデオに収めたプレイの様子を再生し、午後の協議は始められる。画面を見ながら、一つひとつの活動の意図がことばで伝えられる。

また、この日に入った専門家は、A、Bどちらの保育園にも巡回指導で訪問しており、A保育園の実践を、B保育園の事情に合わせてアレンジできるよう助言することができた。

オプションではあったが、この形の研修は、園長・保育士の間ではたいへん好評であり、その後の保育実践に生かされたという意見が寄せられた。

2. アンケートによる効果の検討

アンケートの設問は、報告書の最後に添付した。回答が寄せられたのは52件（園長9、園長以外の保育士43）、回収率は96%であった。

以下、主な集計結果を、項目ごとの単純集計と、クロス集計の結果とに分けて示す。

1) 単純集計結果

(1) 保育歴

保育士としての経験は、3年未満6名、3-5年6名、6-10年10名、11-15年6名、16年以上19名、無回答5名であった。16年以上が多いのは、園長がここに入るためで、全体としてほぼ均等な年齢分布であった。

(2) 拠点園における障害のある幼児の担当歴

障害のある子どもの担当歴は、1年未満20名、2年未満11名と、2年までの経験の浅い保育士が三分の二を占めていた。

(3) 関係者会及び公開保育について

年4回の関係者会、及び年1回の公開保育について、発表する立場と、聞き手の立場から、それぞれの質問に「そう思う」から「そう思わない」のまでの4段階で回答を求めた。

その結果、各回とも、「実践発表（公開保育）をすることによって得るものがありましたか」

「実践発表（公開保育）をすることによって、保育実践が向上したと思いますか」の質問に対して、実践発表・公開保育をしたすべての保育園の園長・保育士から「そう思う」「まあそう思う」の回答が得られた。

また、聞き手として参加した園長・保育士に対しては、「実践発表（公開保育）や討議の内容から、新たな知識を得ることができましたか。」「実践発表（公開保育）や討議の内容は、日頃抱えている問題の解決に役立ったと思いますか。」「実践発表（公開保育）や討議の内容が、現在の保育実践に生かせていると思いますか。」という3つの質問がされ、同様に4段階で回答を求めた。

その結果、4回の実践発表ともに、「新たな知識を得ることができたか」の質問に対しては、「そう思う」との回答が多かったものの、「日頃の問題の解決に役立ったか」及び「現在の保育実践に生かせていると思うか」の質問に対しては、「まあそう思う」との回答が、「そう思う」の回答を上回った（図1-1）。

その一方で、公開保育については、「現在の保育実践に生かせていると思うか」の質問に対して、「そう思う」との回答が多かった（図1-2）。

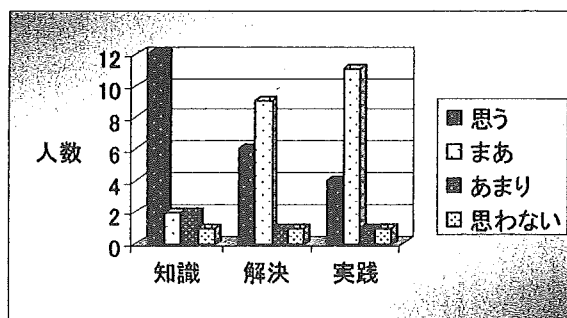


図1-1 実践発表（プレイ）から得られたこと

知識：新たな知識が得られた

解決：問題解決の具体的手だてが得られた

実践：現在の保育実践に生かせている

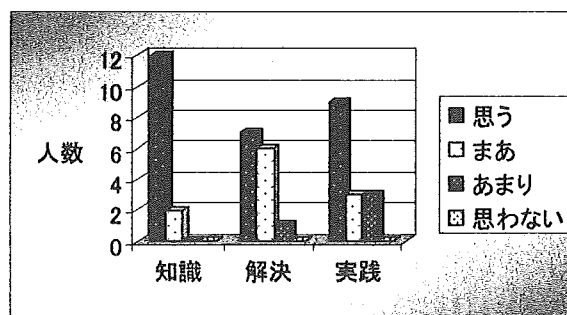


図1-2 公開保育から得られたこと

知識：新たな知識が得られた

解決：問題解決の具体的手だてが得られた

実践：現在の保育実践に生かせている

(4) 巡回指導について

巡回指導から得られたことについて、「巡回指導によって、新たな知識を得ることができましたか。」「巡回指導は、日頃抱えている問題の解決に役立ったと思いますか」「巡回指導の内容が、現在の保育実践に生かせていると思いますか」という3つの質問を用意し、4段階で回答を求めた。

その結果、前の二つの質問では、「そう思う」との回答が8割を超えていたが、「現在の保育に生かせているか」の質問では、「そう思う」31人（60%）、「まあそう思う」20人（38%）との回答で、保育実践に生かすというこ

とでは、巡回指導が保育士の要求にあと一步届かなかったようである。

一方、巡回指導がどのような点で役立ったか、また、巡回指導に望むことは何かという質問（それぞれ3つまでの複数回答）については、表1のような結果が得られた。

表1 巡回指導が何に役立ったか、巡回指導に望むことは何か

子ども理解の知識を提供	役だった 20%	望むこと 11%
発達を促す具体的な手だてを得た	役だった 13%	望むこと 19%
問題行動を改善する具体的手だてを得た	役だった 22%	望むこと 20%
プレイの実施の具体的手だてを得た	役だった 11%	望むこと 9%
交流保育に関する具体的手だてを得た	役だった 0%	望むこと 6%
保護者へのアドバイスをしてもらった	役だった 14%	望むこと 13%
保護者支援の具体的手だてを得た	役だった 9%	望むこと 11%
職員連携の具体的手だてを得た	役だった 1%	望むこと 1%
保育士の悩みを聞いてもらった	役だった 3%	望むこと 4%
他機関との連携の情報をもらった	役だった 9%	望むこと 6%

(5) 研修全般に関する満足度

すべての研修プログラムを通して感じたことについて、「ご自身の研修テーマに見合った

研修ができたと思いますか。」「ご自身に必要なサポートが得られたと思いますか。」「先生ご自身のスキルアップが図れたと思いますか。」という3つの質問を用意し、回答を求めた。

図2に示したように、「テーマに見合った研修ができたか」と、「必要とされるサポートが得られたか」といった、個々のニーズに沿った研修という点では、課題が残された。一方、「保育士自身のスキルアップが図れたか」という質問では、それらに比較して「そう思う」の回答が多かった。

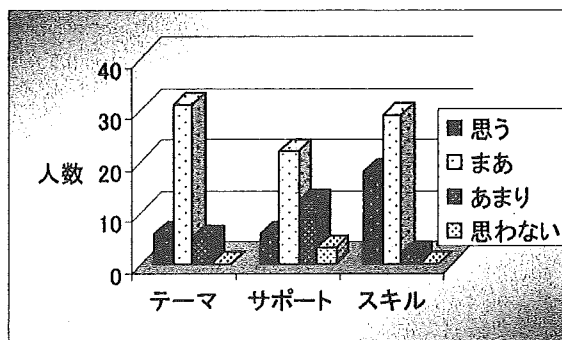


図2 研修プログラム全般について

テーマ：テーマに見合った研修ができたか

サポート：必要とされるサポートが得られたか

スキル：自身のスキルアップが図れたか

2) クロス集計結果

クロス集計の結果、明らかな差が認められたのが、担当保育士としての経験年数による巡回指導の受け止め方であった。

巡回指導がどのような点で役だったかを尋ねたところ、図3-1・2に示したように、障害のある子どもの担当歴が1年未満の保育士（20人）では、障害理解のための知識、発達の手だて、問題行動解決の手だて、及びプレイの手だてといった日々の子どもの保育にかか

わる内容が、全体の80%を占めていた。それに対して、担当歴1年以上の保育士(32人)では、それらは54%にとどまり、その分、保護者支援にかかわる内容が31%を占めた。保護者支援については、担当1年未満の保育士では、それを求めた回答が12%に留まった。

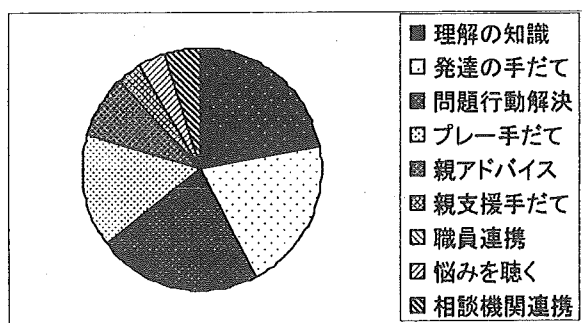


図3-1 巡回指導で役立ったこと
/担当歴1年未満(3つまでの複数回答)

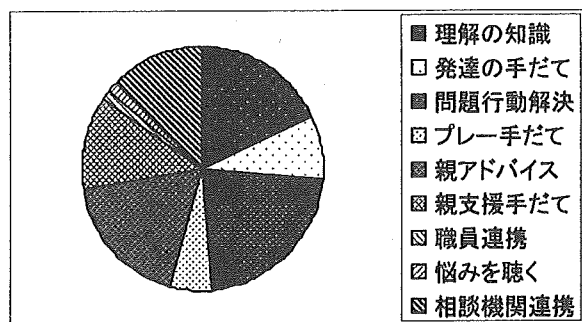


図3-2 巡回指導で役立ったこと
/担当歴1年以上(3つまでの複数回答)

3) 自由記述の内容から

アンケートの最後に、今年度の研修についての意見、ならびに来年度の研修に向けた提案を記述してもらった。52人中、46人から何らかの意見・感想が寄せられた。以下、主なものを整理しておきたい。

保育士自身の研修成果

- ・ふだん勉強できない専門的なことが学べた
- ・自分自身の保育の気づきにつながった、新し

い発見があった

- ・専門家からのアドバイスで、自信がつき、不安が取り除かれた

研修に対する意見

- ・テーマがあることで目的をもって参加できた
- ・拠点園格差がなくなっていいと思う
- ・他園の発表をきくことで、自分の園での保育を見直すきっかけになった。

コンサルテーションと相互研修の内容に関する要望

- ・巡回指導では日頃の生活全般を見てもらいたかった
- ・プレイの様子をビデオに収め、細かく指導してもらえると身になる
- ・保育に生かす記録のとりかたや、教材研究にかかわる研修もほしい

研修のもち方等

- ・実践発表では、話を深めたり、質問し合ったりする時間がもっととれたらよかった
- ・ざっくばらんな話をする時間もほしかった
- ・研修の場、回数を増やしてほしい
- ・交代で研修に参加するため、出られないときの様子が伝わりやすかった
- ・保護者向けの研修の場があつていいと思った

【全体考察】

今回の研究では、岡山市の障害児保育拠点園をフィールドとして、障害のある幼児を担当する保育士への研修プログラムを企画・実施するとともに、その効果を検討するために、アンケート調査を実施した。

その結果、個々の研修及び研修全般について、園長・保育士からおおた肯定的な評価が得られた。その一方で、今後の研修に向けて、いく

つかの課題が再認識させられた。ここでは、それらの課題を3つの側面から整理しながら、今回の研究を総括したい。

1. 個々の保育士のニーズに応える研修

保育士へのコンサルテーションや相互研修は、やはり一人ひとりの保育士に満足のいくものでないといけな

い。今回のアンケートで、個々の保育士のスキルアップに研修が役立ったとの回答が、多くの保育士から寄せられたことは、総括的にみて研修が大筋では成功していることをしめしている。

しかし一方で、個々の保育士の研修テーマに沿った研修ということになると、やや満足度が低下する傾向があった。また、必要とされる支援が得られたかという設問に対しても、評価は必ずしも高くなく、コンサルテーションの内容や進め方に課題を残した。

2. 実践に生かすための研修

研修は、実践に生かしてはじめて意味をなす。

今回実施したのは、年4回の実践発表と年1回の公開保育による相互研修であった。アンケート結果からは、いずれも、「新たな知識が得られた」「問題解決につながった」という回答が多かった。

しかし、研修が日頃の実践に生かされたかという設問に対しては、公開保育では「そう思う」の回答が多く寄せられたのに対し、実践発表ではその回答が少なかった。実践に生かすということでは、やはりライブの保育実践を見ることがいちばんの研修になるようだった。このことは、オプションで実施した保育園間での相互訪問による研修が好評だったことからいえる。

今後の研修では、園長・保育士同士でライブの実践を共有できる場を設け、いわゆる

「learning community」を形成することが必要とされる。

3. 保護者支援にかかわる研修

最後に、保護者支援の問題である。

巡回指導にかかわる設問において、担当歴一年以上の保育士が、一年未満の保育士に比べ、そのことを強く認識していた。拠点園では、チームで保育を行っているゆえ、ある程度経験を積んだ保育士に、保護者支援の問題が降りかかっている。

こうした問題認識の背景には、よく耳にする保護者とのトラブル、そして家庭支援の手だてが保育士に不足していることがあると思われる。また、同じ内容でも、保育士が話したのではなかなか保護者が受け止められないことも、専門家のことばであればきいてもらえるという、あまりいいことではないにせよ、そういう現実もある。巡回指導で訪問する専門家に、保護者へのアドバイスを求める傾向が強いのは、そのようなことの現れである。

ともあれ、保護者との信頼関係を獲得するためには、何より保護者が安心できる保育を実現させることである。その上で、保育士には、保護者支援にかかわる研修が、ぜひとも必要である。多くの保育士が、子どもの保育と同等に、保護者とのかかわりの悩みをもっていることにたいして、しっかりとした手当をしなくてはならない。

【参考文献】

Steven, E. Knotek, et. al (2003) The process of fostering consultee development during instructional consultation. Journal of educational and psychological consultation 14(3&4), 303-328.

資料 アンケート設問

フェイスシート

1. 現在のお立場 イ. 園長 ロ. 園長以外の保育士
2. 通算の保育歴 イ. 3年未満 ロ. 3-5年 ハ. 6-10年 ニ. 11-15年 ホ. 16年以上
3. 拠点枠の障害児の通算担当経験 イ. 1年未満 ロ. 2年 ハ. 3年 ニ. 4年 ホ. 5年 ヘ. 6年 ト. 7年以上

第一部 障害児拠点園関係者等について

A. 第1回(テーマは「障害理解」)の関係者会について

質問1-1 第1回への参加状況は、次のア・イ・ウのいずれですか。該当するもの一つに○をしてください。

- ア. 「実践発表者」として参加した イ. 「聞き手」として参加した ウ. 参加できなかった
※ ア. の先生は、質問1-2に進んでください。 イ. の先生は、質問1-3に進んでください。
ウ. の先生は、次のページの質問2-1に進んでください。

質問1-2 質問1-1で、『ア. 「実践発表者」として参加した』先生にお尋ねします。第1回の関係者会で実践発表をされた感想をお聞かせください。次の(1)-(2)それぞれの項目について、該当するもの一つに○をしてください。

- (1) 実践発表をすることによって、得るものがあつたと思いますか。
ア. そう思う イ. まあそう思う ウ. あまりそう思わない エ. そう思わない
(2) 実践発表をすることによって、保育実践が向上したと思いますか。
ア. そう思う イ. まあそう思う ウ. あまりそう思わない エ. そう思わない

質問1-3 質問1-1で、『ア. 「実践発表者」として参加した』先生、および『イ. 「聞き手」として参加した』先生の両方にお尋ねします。第1回の関係者会に参加した感想をお聞かせください。次の(1)-(3)それぞれの項目について、該当するもの一つに○をしてください。なお、『ア. 「実践発表者」として参加した』先生は、当日別の園から発表された実践発表の「聞き手」として、お答えください。

- (1) 実践発表や討議の内容から、新たな知識を得ることができたと思いますか。
ア. そう思う イ. まあそう思う ウ. あまりそう思わない エ. そう思わない
(2) 実践発表や討議の内容は、日頃抱えている問題の解決に役だったと思いますか。
ア. そう思う イ. まあそう思う ウ. あまりそう思わない エ. そう思わない
(3) 実践発表や討議の内容が、現在の保育実践に生かしていると思いますか。
ア. そう思う イ. まあそう思う ウ. あまりそう思わない エ. そう思わない

- B. 第2回(テーマは「プレー」)の関係者会について (A と同内容質問 質問2-1・2・3)
C. 第3回(テーマは「保護者支援」)の関係者会について (A と同内容質問 質問3-1・2・3)
D. 第4回(テーマは「園内の職員連携」)の関係者会について (A と同内容質問 質問4-1・2・3)
E. 公開保育(三気会)について (A と同内容質問 質問5-1・2・3)

第二部 巡回指導について ※第二部は、すべての先生方にお尋ねします。

質問6 巡回指導を受けての感想をお聞かせください。次の(1)-(3)それぞれの項目について、該当するもの一つに○をしてください。

- (1) 巡回指導によって、新たな知識を得ることができたと思いますか。
ア. そう思う イ. まあそう思う ウ. あまりそう思わない エ. そう思わない
(2) 巡回指導は、日頃抱えている問題の解決に役だったと思いますか。
ア. そう思う イ. まあそう思う ウ. あまりそう思わない エ. そう思わない
(3) 巡回指導の内容が、現在の保育実践に生かしていると思いますか。
ア. そう思う イ. まあそう思う ウ. あまりそう思わない エ. そう思わない

質問7 巡回指導は、どのような点で役だったでしょうか。以下にあげる選択肢の中から、特に役立ったと思うもの3つを選び、○をしてください。

- ア. 子どもを理解するための知識を提供してもらえた イ. 子どもの発達を促すための具体的な手だてを教えてもらった
ウ. 子どもの問題行動を改善するための具体的な手だてを教えてもらった エ. プレーの実施にかかわる具体的な手だてを教えてもらった
オ. 交流保育にかかわる具体的な手だてを教えてもらった カ. 保護者への適切なアドバイスをしてもらえた
キ. 保護者支援にかかわる具体的な手だてを教えてもらった ク. 職員間連携にかかわる具体的な手だてを教えてもらった
ケ. 保育士の悩みを聞いてもらった コ. 就学や他機関連携にかかわる情報がもらった サ. その他

質問8 巡回指導に望むことは何でしょうか。前の質問の選択肢ア-コの中から、特に望まれることを3つ選び、下の回答欄に記号で記入してください(回答欄省略)。

第三部 本年度の研修を通して

質問9 今年度の研修(障害児拠点園関係者会・三気会における実践発表等、および巡回指導)を通して、お感じになったことをお聞かせください。次の(1)-(3)それぞれの項目について、該当するもの一つに○をしてください。なお、園長先生につきましては、項目(3)のみお答えください。

- (1) 年度当初、お一人おひとりの先生に「研修テーマ」を書いていただきましたが、今年度の研修ではご自分の「研修テーマ」に見合った研修ができたと思いますか。
ア. そう思う イ. まあそう思う ウ. あまりそう思わない エ. そう思わない
(2) 年度当初、お一人おひとりの先生に「必要とされるサポート」を書いていただきましたが、今年度の研修ではそれに見合ったサポートが得られたと思いますか。
ア. そう思う イ. まあそう思う ウ. あまりそう思わない エ. そう思わない
(3) 本年度の研修を通して、先生ご自身のスキルアップが図れたと思いますか。
ア. そう思う イ. まあそう思う ウ. あまりそう思わない エ. そう思わない

質問10 最後に、再度すべての先生方にお尋ねします。今年度の研修全般を通してお感じになったことや、来年度の研修に向けてのご提案がありましたらお聞かせください。以下の枠内にご記入ください。(枠省略)